全拾冊 曲亭主人著

里見八犬傳第八輯

上帙五冊 四之巻ノ下 弐拾壹丁

丁子屋平兵衛板

特別
14
600
5

南總里見八犬傳第八輯巻之四下套

東都　曲亭主人編次

第八十一回

荻野井返命して偽刀舊主を還る　三丈士再會して竊盜を重て　詰表を再説荻野井三郎は既に茶店より来會さる祝の家臣們に對面して姓名を告り来由を示す七某は主君より両東使を綸られし副使なれども今朝も労るとあり。遂く旅舍を出れば路の程太く後れて。辨の姫末を知らぬ。幸ひ証人あり。あさけ行れば。々と今来る路にて。金瘡人似児介に遭ひて。他が報る趣を送すると演知しく某

徒てのごとく各々心安為べし。權且這地に逗留して。越後と武蔵へ人を走らせ主君并に千葉大石家へ這出来事を告白すべし。進退の下知を由るべし。勿論炎暑の比なれば東使主従の亡骸は極る飲めて。程近く寺院に預け措くべ。這義を相計ひ給へ。

大家疑心釋さ然るかでも少年る一個の乞児は主従は五名皆殺れ一人は逃れ
さてあくとぞりは呆れ切るのみなりけり浩然三郎は途は遂せ仔覚の代や似児介と駆て来ければ
三郎則似児介に又御武仇の殺れしるの折の始末を尋ねく那麻者は何ぞ
あるを乞人とかるるやと問へば似児介頭を擡げ其儀乞児奴がみづから名告り
たりあけれど落合無の刀を佩とくく人が殺れしるの折は紛失せしと仰こく小が
落合無の両刀を入り初めの内のこなるは馬加とも名告れるに近臣大記常武の親族
なるかんぎるの人是寇家の餘類逃しかせと嗜れるの東人御武殺怒之原
来は奴らのある年辛子は化て俺先代の親子従類をば殺果て逃亡る大阪を
野であんとせしかれ御武殺れて俺幼まく痛疾に成るる孫之中産
論語は絶る大変まるり後は心も冥闇の餘は覚ぬ但那乞児は年数十七
八あるべるん寡れとも容貌優質るれは美しく女なるくまり乞形貌は

似子乞力量剰挑今牛若とのひつぐ乞神変不思議の武勢之あり任れば東人の狂
若如く豫嘯さ少さる旦開野と称いの假少女の大阪はやはりんとのは大家又殺
乞さとかるの月と合しけり奏立時萩野井三郎は祝の家臣はうち對ひて那麻者の
良の嫌る殺験既は合明るれは宮数金は是まくるべし暮るは程もあるんは極るを
いそのせぬと憑るが手るるを乞る祝の家臣は深澤と下の諏方る長と拍化綜任ると吟味て
郡三郎は答るは目今少せるは如く極るの村長は執計はせはへは日の暮るとのるめ
あるは勿論は語はるるは乞は刀傷人の療養之下の諏方の驛長はるの家も三郎は
えく旅宮は如くは那麻力のるるは遊滞は及ばく便宜るんるの義は任せるは
ぞのとのは三郎異議は及ぶそれは寔は便利へ左るの右は計せんとは深澤は長
と驛長は分ひとりは乞はより祝の家臣は件の意の趣は茶右の主人故光の荘客通は
這里は聚合るのは屍骸は手へ遣はまくるは乞と告接は三郎と共俗は

茶店を立出でゝ却三郎を別れを告て宿所を投て還りゆくあり。當下御武豊実の伴
者這刻を留りて主の屍骸を成るもあり。又似児介を茶店の板戸か桑を元と帰も
あり這他の御武豊実の両刀を捧へ鎧櫃を担ひ萩野井三郎を後に旅亭を投て
以後余程を萩野井三郎に下の諏方を驛長に安内を求め旅舎に着しが。
夏の日越る黄昏みけり金蕎人に療治あり本撃る醫生ケ来る。似児介の疵を見ひそと
夫の時萩野井三郎に豊実人と御武の鎧櫃を持ち如かゝ那首級を横る故の隨ゆゝありけれ穴蜘を
心を安くつゝ又御武と豊実の腰刀は若當黨を持せと共に此彼七口の一箇も紛失せざりけ。
中に小篠落葉の両刀と小丈吾の腰刀は両東使の腰に踏るゝ萩野井三郎
是を頼りて臂近に措きけるさ花伴の三口の刀は御同に莊介小丈吾の穴蜘を食昏り伏人負の
小篠落葉の刀と三郎の初り伴の刀とをもて又藤路に赴たく両東使に忌嫌化を推垂て
ゆくもゆく旅舎を倡はせ居りしゝ刀の真偽を知るゝゆゑく片見へ注進状に首級并に

両東使に赤貝一ゆひ一三隻の刀は別義なりとぞ寫さりけ。有徳しかば三郎は次の日の朝
の身の倡りに若當黨に奴隷一名を従へ注進の為に後へ退一又豊実と御武の
伴當の心利きるもの二名を書翰を齎し武蔵石濱の両城へ這回変を報る
けり然は又東使主侯の亡骸は當夜深澤の村長と茶店の主人仏の柩を敷り近辺キ
俄に遣つ權且那里に寄せ置あり。亦茶店に送り両東使の伴當も次の日
下の諏方に聚合まつ伴のもとに三郎は数人無倡に這留まり旅宿の徒然なるに。
徒而一旬ばかりを歴る程に大塚石濱の両城より士卒此彼十餘名各々君命を受ひく御同に
萩野井三郎に遣しる豊実御武の伴當を面〻に君命を演非當の役義を号ひて却同に
憚むべく恐るべき伴當と武器行李を受取て武蔵へ還んとのいかゞ三郎いまゝの意ホ
儘せて旦暮ホ服大分自分の豊実御武の首級を小篠落葉の名刀と、文吾が

刀の柄林々と説示す。今這東西と各住を遥与に分ち、宜しく可んや否やと問ふ。
及びくかり見まより尼見へも曾の日注進をなりし。然るに左右あらん且くその事を等
閑に理を奇す留めり。大石千葉の士卒們の只得く共を逗留しく諏方の祝の宿所を
赴く。那日御武們が枉死の折尼會を預りし。那深澤なる村長許五郎
是に則長を案内して御武豊実主殺の柩を寄せる某院を到りて住持を乗意を
演べ。件の主僕を埋葬して死しく一旬有餘を経る炎暑を亡骸腐爛して臭氣を画と
向かさければ主僕の痕を撫でまた及ぶを些の銀を布施して諏方の旅亭を分ち来りけり。
左右を程を尼見へ遣はる。萩野井三郎が伴當を保証輩由元の脇力到来して大刀自が
前の下知状の三郎とれを受戴して誰く寛実御武枉死の入れ荘介小文五
西面の首級并を小猿落葉三口の刀を萩野井三郎を預け遣はす。然武蔵へ帰りて大石
千葉へ贈るべし。這他のるれ住々と最詳を聞られ三郎既を及意を千葉

御武們の枉死の顛末

大石両家の士卒を件のを演伝へ祝の宿所を使を遣はし武蔵へ赴くと報ず両家い
士卒と共宿を次の日辰立ちとなる。その時仮児介が金瘡の薬を果れも械ふ
捉へ朋輩を救けて辛くてやくありあらん然るその不便なるあり。那二大士の假首級を
御両を共小文五郎が親を酒を食を毒を温湯を入易くりけるをけりの大矢是の時れ
初尼見を命ず。
猶ほ俄を弟一郎三郎が肚裏を旁を愛を爛れ臭氣を堪ずるを路を毒を入れ
めく連りを路を左右を七月の上旬を武蔵国豊島郡大塚の城を来着せ。
士卒們れ件を主君ふを萩野井を待を御武が伴當を具して石濱へ罷り今程を萩
野井三郎を大塚の城を着しが仁田山晋五郎を迎へ面しく長途を苦しく数様態大
かを毒を時三郎を服大刀自を賜来を。犬川義介が首級のを犬田小文吾の刀を
君命を原来意を示しく豊実御武の枉死の顛末御武が双親仮児介の自供の

殿の仰せとて。

件の首級を小瓶に斂め美酒に浸されけるも路すがら不憚の
来る。滞道一旬にして漸く暑熱に折られが既に腐爛の臭氣あり。憚り多くも
主命なれば持ち来れるなれども左右も宜くせよとあげさせ給へと慇懃に演說して首級を
斂め一箇の小瓶に納め腰刀に添へて晋五郎遥々と来る。
主命あれば別に返辭は那首の必ずなる美酒にあらざるべし自由の手なれば
生も丁田生と共伴して枉死なり。両所の使者馬加
滞なく。あの[illegible]の人々とは晋五郎の難儀の意を儘せば三郎は愛嬢
佯當を偽り石濱なる千葉の城に赴くに家臣猿嶋連に就て君命を演ずる通り前
條に異なるまで首級を斂め一箇の小瓶と那両刀を合せて連に遞送の連を
これを受とり馬加御武刑が枉死の折速に報じ言葉を述べ且休息をなすべし。
猶可に旅館にて死行ひ人を謀り酒飯を薦めて萩野井主僕を待ち徐而

野井主の話朝正聽屈官位千葉自亂は見参を原是通家の使者なり。
佞とせ儲けるけれども近習の家臣幾名弥主の後方に侍りて當田下自亂は先
大刀自の安否を訪ねて猿嶋連を[illegible]
少者惟順の首級を[illegible]腐爛して[illegible]
沙汰なるべし件の大田小文五郎は孤も亦いま
あが必真首を[illegible]遂路とひ暑氣の折逆歳に不慮の拒障いで来て逗
留る日を[illegible]右[illegible]の以ある使の過失なるべし。又贈られ一両刀は
昔年這里ふる紛失なる小篠落葉[illegible]馬加御武の片貝殿に謂せ
[illegible]既全定まるよう[illegible]ども那邑刀の[illegible]家より許[illegible]年を歴[illegible]れの御武が疎
忽なる認[illegible]遅へる[illegible]なるかとう因て贈られ一両刀はの侭返しなれば[illegible]片貝
殿へ[illegible]と具[illegible]へ[illegible]げるべし又馬加蝿六郎御武は緊要の使

一説あるべしと。

るゝ。故に悲人と斫棄て遂に又悲人の為に殺れい是本覺の寿命を那折迄る作者、
後れて其期に及ぶとは若雷奴隷も共に罪あり。這度の異日に沙汰せべし。帰北の折
件の旨も執奏へ通達せれよ。遠路の使太義なりと懇に労らる。帰国の暇を乞い
ろ。瀾一る二口の刀を受て依返されけり。佞臣罷出て家臣猿嶋連介に尼貝の執
受由元へ連署の状を遣せ。三郎元を受取て又大塚へ赴く。城主大石兵
衛尉憲重は西管領と長尾景春と和睦の力者五十子の城に在り子息左衛門尉憲儀は
聊中暑の差あるとて則仁田山普五郎に返答の趣は石濱なる自亀の口状と異
なる首級は能く腐爛して島首なるを贈られ那刀を鞘上社平の親族
なる甲乙に見せるに社平の刀に相違なしと。寔なるかの。よって刀を返普。其の餘は書
中に載せ元を見執奏に届けるべと。濱さ憲儀の自筆なる由元に与る。簡
一封と件の刀を遣手けり元より三郎は大塚の城を辞して伊豆田に這度は

蔵地まで退く。這首は宿投り那首は態ひく。と則一日も疾く柴月の某の日に
越の尼貝は帰国者に執奏稲戸由元は御武豊実の仕死の顛末石濱大塚二人
所の回報を詳に告知る。大石憲儀の自筆の簡と千葉の老黨の連署の
状と那返された三口の刀を出て由元に遣せり。登時津衛由元は刀を視て書
翰に接して怪むべく疑べるを見て夜叉を捨て書
遠く出仕つる都老夫人は見参して萩野井三郎ぶかつて石濱并に大塚より刀を返
されて絆の趣自亀憲儀の返答を箇様なと上えあげて二通の書翰を携え
ると大刀自は詩のべて津衛其首を讀むべと。讀て首級の
炎暑に傷られしは是非に及ぬと。乗刀を相違して返されて本意なるべと顧み
自分の仕業なる那斬御武豊実ぶよも認て生堅を建て信を表はし質を出で
婿達へ贈遣したりける。疎客の所為なるべと。仕ん最嶋て耳へ現馬加御武

落葉の刀を試せとて乞児を斬るを見て島許の白物くけれども性も知れ
ず豊実とても亦人の那仏が撃れし為体は獄門さるとるべう後の生きるの乞児が
犬阪毛野あやありけん石濱まで其勇の詮議のまぎるるまで欲しくもやと問して由元
さこは石濱まで大塚まで御武豊実が枉死の俱に見不覚の罪あり那折進上者壹
奴隷も後日は御沙汰あるべしと仰られひとを他仏に御仏の人をとゝ左も右もるべし
那少年なる乞児が犬阪毛野ありとの風聞到居の今ゝ信濃三界北陸南海隈も
あらず所を渉猟て捕捉せるべしと難儀所なるべし就て昨今世の風を絶ず
はよ獪は誅戮せれる大川大田両勇士は真の荘介小文吾なるべし出者修行を做
那名を変綱こそ人を騙て渡世の資助よ搦捕れて首を刎れたる世
評はこれあるまじのと倘宜あるべし三口の刀の相違まるも理りよしんば実を変名誘亦
大刀自ゆゆ果果てまるべし刀のあるべし荘介も小文吾も雁貫物をありげる欲まの風声外聞

よるべいあるべしが名を名乗るべし向後を伝と感めよ返されるべし三口の刀は再睡見るも忍ぶを津衛
作は取をべし又荻野井三郎が今番の計の神也と然れども労せるを攻めを軍何見あるべ
光を白井殿是者とより同化をい出ぬあれ秘めるべと長尼示べ初由元を諫て折用ひべう
志を今ゆゑ後悔の色見えまけり低而由元は宿所よ退るべ獨宿鶴を思惟るを今番石濱大塚数
遠花を三口の刀は俺がいる比荘介と小文吾は贈りて刀を竹磨何の間を引看て那二大士は其
身々の刀を取りべ走り先是御武仏の撃れし折を二大士の料らずも遭際べ四下を人の
なるべを宿鶴は刀を金は易る欲量義は二大士が別を臨べ俺仏の両刀の再るを今をあれ
便を就べ這刀を返しるれとひとを要るを言をとひとを言と行ひと選べ這里
返れし刀は俺亦料べも老夫人より賜べ復俺は東西よりけるを嗚呼奇なる奇べし
それを意を二大士は神物のべ話るを物元人なるを知べ父のをとをとべふ人は生べ元
感嘆の外るべけり安下某生再説毛野荘介小文吾は那日

小文吾

この段の本文八
題より下第十
五殷まえ〳〵
荘介

晡時の比及る青柳の驛なる駅店に宿を投め浴湯し飯くふて果て〻偃居をり〻
過去来の用談數刻に及びけり折〻宿て俱なる旅客のもろ〻しみ月の明し夜の
糸と繰ふ夜鳴何に暇なけれ〻やく饌果て〻寄も来て歓待能の陳るしと大きの與
あり部おきなとをひる小文吾先毛野に繁に墨田河おく別き折毛野に乗る柴舟に
趣着んとをひる俤水中に跳今く渡信を凌ぐ酒〻しかとの舟快けれ〻竟に及ぶ
河上より漕〻来る別船に身を寓せ〻料〻と依に遣りて又市りの行德の
毛野を発〻て鎌倉に赴く〻すのの〻ん小後の又難辛を経て越後の小千谷に旅宿せ折
荘介に聯りあり多次郎太郎に藏九郎ぎの暴牛の酒顛二船虫ぎの且其介の智勇の
挿に酒顛二并に手下の衆賊を殺金ふたるの又片見の大尼難稲に由元が好意あく死を
免れ〻古文の趣茶菓大石の両東侯御盛豊実ぎの首より尾まで一事も漏さを説
示く和君に亦那折に何処を投く走〻春遠信濃路に流落り八盤費竭る故る

死と同れ〻毛野に頭を掉て俺身に盤纏多〻ねとも其の故あり〻ぎ〻乞児に形貌を
窶せ〻ん為に石濱の追捕を免れて親の仇る縁連が所在を素ん為る元墨に墨田
河の頭に〻那柴舟に乗り折風波高く潮快けれ舟を返さ〻ち〻及ぶを水際に立
和君の〻人の心あらぬるあ〻ねと勢ひ既に見捨れ流に儘に艫を操り〻走〻を五
里あまり羽田の浦曲に舟を捨て舊里に赴く相模る犬阪村に赴く願成院と唱做
る山寺に任持の僧に俺叔の叔父るけれ稠に其里に身を寓せ〻解を三稔ぎ
て〻諸国を巡り〻〻竟家に帰る果さを〻心の已〻に住持の先
ぬ〻に空に光陰を過せ〻に十歳の十二月末の日に住持の遷化ありけれ中陰廻
遠忌の〻ぬ〻を辞て京師に発時歳宿を〻又引返し〻岐峠路に諏訪の邊に
露宿し日を経し亦以り竟家の面を認ねが環あるを名告ぶ〻〻〻
上とをんん世に人力の及ぶを化心を盡し〻神佛の冥助を祈らぬ〻〻

神社仏閣まで人毎に祈念を凝らすを奉り諏訪の庄頭は籠山と唱ふる村あり
宮家の姓氏と相似れば如何なる遠東太縁連の苗字の地なるべきや。とひつゝ其の夏の當
否を諏訪の神に祈りく權且那甲斐なきひとりぐらし空あるべきぞひけ故和君何は
環會のるのこれを此彼共に一對なる恋とひ又玉とひ過世の契を知る足れり。
優婆の所。這里に聚合し三人の外に同因果の弟兄ありと云れしが什麼誰なるぞ是
なる縛の本末を具に知らまほしかり。と云ふ壮介膝を找めく約ハ名なる人を天縁ぞ
熟なるや方便同因果の弟兄ハ和君とかゝる七名ありて人々ハ徒さへとく信ハ道節が
現八親兵衛なる皆その素生本賀出処を詳に説示すく徒れば這七名ハ當に異
性の兄弟なるべく俱に里見の家臣なる人過世の中に因縁ありて故ハ道様々と伏
姫の自殺八房の犬のこと金碗入道、犬のこと并に蜜崎照文のこと山林房八と仲真沼
蔵文五兵衛のこと又濱路のこと世四郎音音カ二尺八寸と草節のこと忠信孝烈節操義

侠の行状谷差あれども良義の吉の堅果君徒々と次第奈良長談
佳話は小文五の赤語を継ぐこの足ざるを補ひ言の葉果し夏の日ぶくるも
草こと短夜の更ぬ鐘ぞ聞て渇すとて額を鳩ひ毛野ハ連ゝ感像しく。
或ハ哀と或ハ歎び或ハ微笑を或ハ嗟く千態萬状なれあるべく慷慨嗟嘆ぶ
堪ざりし身に摘くし知る懐舊の感涙眼包に餘りけり。

第八十二回

主月柳の獣店に潜智詩歌を題を
穂北の驟雨に礼度行裏を喪ふ

登時小文吾又いふやう俺ハ秘蔵の玉の原是里見治部大輔義實朝臣の息女
伏姫上の臨終まくに衣領に掛させ水晶の數珠にてその數とのの八箇の玉姫上
富山に自刃の折先を菊に蜜屬しく性方ハ七ツ件の數珠ハ姫上の高仏か
ら比徒さのくるよりく。伎行者の示現あり是感得の神仏まく就中八頭大玉中仁

大士の宿因の看経疑を
無きと尺し
の義と知ら
ければ
小十年及
覆く説
但の八人同
はだの
水滸西遊と
かさとよろ
亦是等の
雖物語り

義礼智忠信孝悌の八分の文字あづかり見れるり。昌泰の舊里を離れし時、大法師と
邂逅しく。これ前の縁故を聞き知りたり伏姫北世を去りのひの長禄二年の秋なり。今茲
文明十四年壬辰の夏まさに星霜二十四年を歴ぬ。恋れの俺ら七犬士の未生以前の
へるりれ、大法師の當初金碗大輔なりし時伏姫と妻せんと義実思食とりたまひ
被命諾まる。長禄元年のなかば伏姫富山より遂に身まかりぬ。久金
磯生の姫上の苦提の為に祝髪しく法名を大と喝ばつ剛の八州を行脚して失る主を求
んとて飛錫三年を歴ぬ程る今より五年前文明十年の夏の比犬塚信乃犬飼現八
某と倡ふ三名件の法師と北堂崎生に料らず名告あひ、折し大法師の素の玉は見慣
れし幼稚の時の底得まる玉なるよりし皆まを見れば文字よりも新たなり。又は這玉のまま
のあるを名多の方は疑ありて形牡丹の似なりしの那八房の犬の毛色に類りしかと見れり。
然れども是れ同因果の犬士八名あるべしよりも伏姫上は犬士の與ふ過世の母なるべし。

縁故を詳に説諦されく。世に大諸侯ふ犬士は必里見殿に仕へ給ひ由緒明
證あり義實卿父子は士ふ賢を愛給ふ。明君へ誘ひ安房へ相伴んとの花る
けれどもの折は犬江親兵衛と倡ふ四名の人うり這餘の四犬士を求巡りて具足せ
安房へ赴く里見殿に仕へ給ひ且く賓客ひと辞ひて後り里見殿より賜る
より。沙金を多く恵れり這後犬山道節あり。今又和君を求巡りて七犬士を
一人足らず。又犬江親兵衛は山林の獨子なり。四才なる日秋七月神隠しとなりぬ。
往方も知らず。あり年より那身に恙あり。今茲は八才なり。必ず今茲は八才なり。必ず
一箇の足らず。一箇は何の時に具足せん果るべき世に果るべき旅宿はいたの與なり。
といへば又壮介は四下さんなり。寄之低めて犬田大塚犬飼のへ大法師に懇ぬ。
石家の獄金なる。程なれば後に嘯く。大名のを恵而近曽石未る指月院玉某も
又道節も、大法師と北堂崎十一郎一照文よ環人官ふを。離合は時あり遅速

あり、わかく、父ハ、くるしみ、なやみ、八犬士を見足らく、素懐を遂る日あらんや、獨あり進退、犬士ハ、
玉を視るまゝ、暇なり、俺何の秘蔵の玉ハ出処谷異、見れども皆幼稚に時感得なる。
その趣ハ信々、只母の胎内より、握りて生れ、けるハ犬江親兵衛のみ、犬江ハ犬田、性質ハ
小文吾ハ最細、見を、某ハ偽りの、獨犬飼生の秘蔵の玉ハ、いまだ出処を詳ならざる。
いつわりなるひとり且俺何が秘蔵の玉、とひろ、小文吾と共伯ハ護
身嚢の幼解を、玉を取出、くるる渡せば毛野ハ、猶ハ両個の玉を、なほ見入載せ、
燈光ハ寄て、熟視るに、現此彼一対、但その文字同じかも、義の、なり、悔の、
あらく、彫出、鮮明、これが感、先這両箇の玉を返して、遠く、衣領を、探
まく、やとり、一箇の玉を、壮介と、小文吾の、這代、よりて、愛て、これ、這、智の、
玉品通、異形、ねり、奇也、奇、と、歎賞、ふ、視果て、毛野ハ、返して、当下、毛
野ハ玉を、敲めて、某が、這玉ハ、未生以前、母親の、料らず、ゆる、俺母ハ、人の、側室

ゆく、俺身ハ、是、の、送腹の、子、なり、月満ても、生れ、懐、浮、既ハ、三、稔、あく、栗飯原の
家、新、絶、より、母ハ、相模の、足柄、なる、犬飼村、ハ、存、一時、獨、時候、外、出、ハ、忽、紙、と、流
星、似る、一度の、光物、南、より、星、降、渡り、隊、と、ハ、俺、母の、懐、ぬ、ぬ、
ハ、ぬ、ぬ、ハ、ぬ、吐、嗟、と、なり、駭、叫び、慌、懐、を、探、ると、小犬、老母、草の、実、ハ、ぬ、洩、白
の、玉、ハ、ぬ、ハ、怪、ハ、宿、所、ハ、選、り、又、件の、玉、と、なる、玉の、内、ハ、智の、なり、是、人作の、東西、
あ、ぬ、の、ぬ、ぬ、字、體、を、微、く、と、解、明、る、讀、し、わ、が、要、あ、べ、と、ひ、ひ、躰、ハ、錦、匣、ハ、紐、
指、ハ、よ、の、志、初、更、の、左、側、ハ、母、ハ、猶、す、る、産、の、氣、つ、ハ、俺、身、を、安、ら、ハ、産、ま、け、り、余、復、玉、の
来歴、と、母、の、ぬ、く、く、寫、者、く、玉、ハ、ら、共、ハ、俺、ハ、腰、著、の、護、身、玉、裏、ハ、義、ぬ、り、と、稍、物、情、ハ、知、
ま、ハ、ぬ、ハ、比、ハ、雖、佞、と、母、親、の、説、示、ハ、ひ、ハ、佞、者、特、ハ、ぬ、り、ら、寃、家、馬、加、常、武、の、獄、ハ、と、怕、て
某、之、母、の、子、ハ、ふ、物、で、空、言、ハ、ら、鐘、倉、ハ、移、住、ら、ハ、梨、園、の、隊、ハ、入、ら、ハ、ら、ハ、既、ハ、て、復、仇、吉、の
志、縁、と、ハ、く、年、十、三、ハ、ら、し、時、父、の、諱、の、一、字、と、取、て、名、と、信、智、と、命、ぜ、ら、ハ、所、得、の、玉、

知君と語る名のあるあり

見れば文字なども定稿を表せり。犬川大田二兄の名乗り玉の文字より由られし。犬と何への荘
介小文吾は共信と雙頭の連珠を頭に通せる玉児の由来なる旗は異なれども奇は自他皆異な
らぬ赤是不思議とひつべし。王の文字と名よ命せり俺們は赤介なれと。犬塚成孝が忠孝
犬飼信道犬江仁道四名も忠孝仁信各玉の文字を取りしう。いひ合せと義兄弟の名称
一致の過世の応験来りしと成程知らぬ一大奇なるかと民管稱へて已まりしと毛野の
いひ感佩しく犬川生れの両刀を小篠落葉と名けし由是縁故ありと。何を荘介は敢て否
這刀を名なりとし某は只宝公孫の両刀とて偽れり刀の鑑を安の服者なる愛藤なるくあり。
然るに千家家まあり一時小篠落葉と名けるなん小篠は赤見の鑑の花蹄猫雪條とあるより落葉は
刀の刃先に些の疵あるなれ無名者あるんじんとあまた毛野赤感嘆せり。その者は美へしと。
落葉の葉は刃へ刃の聊爾落れバ落ちるとい名けしと那御武がもうるの。
人を斬るとの時ふるの四下の木葉の零るとありといひ詰りく罪なんを丐と砍棄しの。

初御武は論しのく偏を造りし傳を文なれいも奇怪好ましう這失ありと丐へく罪なを殺せぞ
思ふ文の報ひい覿面御武主僕のうかくがあるのりた。豊宝も其里よ命を隕しくう郷々俗よの
似而非推量あり往る錯誤まくあり世の胡虜まるんのとうが荘介領尼々那们は素より半背の
小人吉君すの歩は根るを足しくを初和君が這刀を爭ひ奪動聊ホ仍ることあり異を大山
道節ク村雨の刀のまよ今し折女弟濱路が枉死の末期を大塚は返せといひ道節はの
名刀ひく君文の仇なる定正まを近のなて動るんとひ花の茅引もの祈る某の料ぶも遺際
この刀とりも復えんとし。道節と戰ひまめ別れまるく雅ちと知ぶれ花を六月の十九
日の夜のり狂ひ結ふ七月の初旬荒井山ゆく道節も大士の隊を因果を作りて刀矢深
返くう然が和君ぶう這両刀を亡文の故主の重宝へとく最惜こひ一と某ハホ六まの紀伊
ゑんと爭ひも能ずく不要も返えれう。拾去恰とん忠義節義の孔を生ぜ倘這矢ひ微りぜ。
異僧の弟兄るり。初しく路人を生りかんと爭ひて和しく和しく拾ぶ造化の配剤世ふ

かゝる此彼似よるまゝぐゝもとのふを小文吾うちの天ひゝく仇くうとらゝいひもせんえんどの越同一かゝ信乃
ゝ現八が許我に組撃ゝまれ山林房八角觝の遺恨も初の怨敵後の親愛日を同くゝく談るべし
大山大隈大川のゝへまのゝ豈偶ゝんやとのへの荘介すゝち微笑て寔ゝ然へと応ゝ答ゝ毛野ゝ
徹然と荘介小文吾ゝうち對ひゝ二兄ゝよりゝ聘ゝ知る大山生の君ゝ父の仇ゝ定正主を撃ゝ
くゝも君と父ゝを害ゝゝ越杉駄一寃門三宝平遠両敵を撃ゝ掛て志の我ゝう某ハ馬加
常成父子従類を撃ゝ亢れども父を害せゝ逆東太縁連とゝ云ゝ撃ゝ伯ハ一日の心安ゝ
奉ゝ仇ゝの罰ゝゝ郷武仏ゝと撃ゝ果せゝ偶然ゝ亢れを撃ゝ唐山ゝ張公
糊盗ゝゝ李ゝ公ゝ縄ゝゝとのひけん暫語ゝ仮ゝうけり何の日ゝ縁連と撃ゝとゝ云ゝ父ゝ
父ゝ云ゝ方ゝ也ゝ心盡ゝと密ゝ一ゝ人ゝ小文吾慰ゝ恐ゝ毛野ゝ相譚
ゝ小文吾ゝ遂ゝく行裏を解ゝ金十両をとり出ゝ荘介と共ゝ信ゝ亢れを毛野ゝ
贈ゝ遂ゝ送ゝ宿望ゝ旅宿ゝ般費ゝ肝要ゝ某ゝ仇ゝ幸ひゝ徒心ゝ盤費ゝ

賈ゝかゝぞ勿論今日ゝ後ゝまゝ影ゝ進退ゝ倡ゝくゝ
ゝ然ゝとも腰空ゝくゝ折ゝ不便のゝのんゝゝ薄義ゝゝへゝ受納ゝ
毛野ゝ推禁ゝくゝゝ浅ゝゝ
近況ゝ折俗縁ゝゝ故ゝゝ又十金ゝ遺財ゝ郷高ゝ既ゝ
空毒ゝゝ盤費ゝ竭ゝ故ゝ
推辱ゝくゝゝ談ゝ
今興ゝゝ助ゝゝ里見慶ゝ
金ゝゝ減ゝゝ宜ゝ加ゝ
ゝ毛野ゝ引ゝ件ゝ金ゝ
ゝ指月院ゝ大法師住持ゝ今那里ゝ大山道節
住ゝ指月院ゝ和君ゝ共ゝ那里ゝ到ゝ大山蜜崎ゝ快對面ゝ

謀て毛野ハ策引て某とも那人々のおつかぬまあらねども窓仇にぞまのがく迷ふ欲良友に面會の端甲斐ぞあるの是者を後ぞらく義を先にあらかの子ならずの折もあるべからず。今番ハ先ず出でと固辞を小文吾側より徐ひらるも理り然り今さら寛容ぞ不運。所在を探り得る事あらねバ甲斐へ赴くとも是孝道の虧るにあらで百足の虫の死して…その働ぎなのハ助けなるやうとくしそれが甲斐へ赴くを料るど仇の所在を知るよしあらばこそ且俺儕七犬士ハ里見殿の家臣と称へ二世の因縁あるものゆゑ八犬なる具足して俱に安房へ赴く日を誰久より前知せん某们ハ犬塚犬飼犬江這の二犬士に索て竟に環りあへべ。和君も兎家縁連を索て本意を遂れ且を安房へ赴く時と知るのミ逢逢の期も定めがたくかくの如く殺されを遠れより石未まで二十里に足らぬ路なるに何ぞ數々そのあだ元一圓那里へ赴くのへと彈を書して説諭せバ毛野ハ且く沈吟して里見殿の仁政武徳伏姫上の孝烈義侠ども餘も忠臣義士節婦の那行状を傳せ行心裏恥らるもの身の不肖親

あいまだ孝ならざ支ぞ信を疎かにぞ犬士の肩といはれるん猶さく皆慈首尾両端速かに決断あるべし。多分く再四孝思して翌の朝ぞ論を交ん且く寐せんとて荘介諸るひき。いはて趣理りん雲時の程と定めよ夏の夜なれバまだ深からず誘就枕とし。ねまのへと行きて小文吾も強難して乞ぐ翌のよみせん圖宅の男女ハ何の間に臥房に入りし歓音もせぞ。帳さへあれバ夜ハ安かりいざとぞ小三枚の臥蓐を各々に開きつ吊帳を引て三人して吊帳六布七布萌黄の帳ハ色褪て八ハ過るぞ暁に枕すべき程もなく皆睡を熟けける。介程に荘介小文吾ハ信ずも熟睡やしけん明るもしらで臥したりして旅舎の婢女に喚覚されて。驚きあわてつ共侶に起出んとして傲となる犬阪毛野ハあらずけり他厠へや登りけんと又び見れバ拱合せも帳の下を掻揚て出んとする荘介て小文吾やよと喚とめて犬川主名子へ犬阪が臥たる迹に這東西あるをよく見れバ五両包の沙金なるべし見るも是三包ありといゝ荘介眉根を顰めて。原来毛野ハ復讐の宿念を遂るまで孤身単身であらんとて潜に先

ゆくさき数知らずなれども這沙金を送られしより本意なく心時移りぬれば想留んとなす小文
五十の年月安穏に過ぎ難き世を遂に臥竜の草に出でぬ縁類の這方を建て引き
障りとなる人々が数行の大字なり要して
凝成白露玉珠の全　環會流離儘自然めぐりあひ甲斐ありとても信濃路
別れゆく山川の水　河ずまるれば衝脊の件の沙金を相添て送せ　詩歌と猜るのこ
獲捨る追蜻　大般若の浮世成の寫れぬ　七三二句も三十一字も拂ひ捨て感つぶ
字を感解なれば　明るること莊介只顧感嗟　大田は何と云ふまぞ
現乱智は孝子　既る過世の因果と悟りて異姓の舎兄は名を変へ　あよ知ることなく
復讐の宿望を果さんと爲ふ　親然とりて立ちぬ　詩歌を題然の紛貴
賜父母　又母あり　後は兄弟あり　兄弟あり　妻あり　妻あり　子孫あり　子孫あり　本懐意愛
及び　けんご　幷は輕重前後あり　孝は百行の基なり　必後はそべて忠信仁義の孝なり
程なく廣紛

べし　亂智は義を忘れず　人俺は共伯は甲斐の石禾は起て　大山は對面に在ぬ　八大は足
これは這裏旅舎は異なれば送る意中を盡さんの身は大望ある故は自餘の犬士と一月日索
巡ぶん暇あるを待れば宅家縁連を輙ぶ　後は後妻　義は盡さん信を致さあり
折まぬ已に逢遇離別は拘ぬ成とあり　圓圓の時を俟んとなるを這十四
言の句中は筆　凝成白露　云云と寫遂せるあるべやとしがれ文吾要頭で寝る
毛野は才なん某文舞は疎れば然まるよ了解せ　かども歌のるるらく少なく
理り　どもどもぬ　大なるめ文を結ぶ　贈り金を返せ面は程ひ後は
詠ぶ浮薄の友と云へる旅ものすぐり　毛野は俄ひ　恨べーうむべーと　猿返て嗤
莊介除は　大田生急思べ這金を送れ　赤ずはあり　化と自
とり義を結び異腹の兄弟なりとのべも　金は咱が意は惜らず貪る　仏く
漠々ぞ然しく金を返しくれ　義を破る憾あるは故は俺が贈て金を受納め

沙金三包を送せり是贈答の礼なり他より咱る餞りし昨宵の金を返さまほしと沙金を
原是燒金なりその價廉ければ這三包の十金の答礼まさに相當ひ信てを受て貪り
返さんとすれども義にも破れ智慧を勝れるものとうくせんや恨の無き
とをとそと論ずれば小文吾百會を持て然聽て他を鹿落れるを和殿の細作
了ぜず兄弟墻を鬩ぐとの詩を仰ぐ猶恨あんとをうばりしの恩徳なりと那犬飼が思意
深多■石濱なく夜討の折の武ある玉物の進退及ばずと感せと忘れて履を立さ
了ぬ可矢小文吾と悟詰れが莊介合笑て人多く集る所あり齊かれ犬飼和殿を
及ぶを智計の和殿なく大伴と及んや八行の内中智の字を忘る応験あり也の任ぜ
且く度外に措て甲斐の石禾へ赴くべし小文吾然りと応へて遂に縁類を戸推
開けて漸く身装を整る程しあり旅舎の婢妾がもてなす烹立の饌の早飯も友たへ
又這里に一箇餓ると椀の高装飯に味噌美汁撰て義の是さへ山川の歌も仰ぐ三人

前あるあまりある昼餉の料の割莫も倶に受取て胸の憂也勝也いがえるいでは包
銭茶銭も添て房賃を還すべく朝飯を五ツとて莊介らは拭ひて僧まの
文字を排へ滅て逃も多く往方を知らず犬飼と搭て忘れぬ昨宵の図生夢ぐ
覚て悔の鬱悒自月と峰と雲の集る甲斐路を投て行て莊介と小文吾が這
地に毛野と相別れてあるべく道節を既に石禾の指月院に在てぞ居るべと知ざれ
空を見る朝涼の雲時ありて弁る日に堪ず酷暑を苦笑る凌ぐ倶に後の目休
題。單表■大村大角礼儀の曩に犬飼現八信道と共宿に自餅の
大士と崇んとく居宅を捨故郷を離れ且鎌倉に赴くべく旅宿に月を望て
些の便りとなるべしかの箱根山をうち踰て伊豆駿河いがけくと遠三尾勢美濃江
江城下郊外村落まぐ道里を辛苦今年の秋の亡妻の三回忌の手向を投ずる旅の
歴たり笹下大原を辛苦今年の秋の亡妻の三回忌の手向を投ずる旅の

詣でゝ且雛衣を提げ吊りて物乞ひ諸国を巡るべしと暮田氏をして現八に伝へと現八は相謂ひて
現八は叶ぬ異議を反ぶべきものゝ忘れかねあの夏六月の下旬に現八と共伴に下
野真壁の赤山岩なる菩提寺にかつ来て所縁の宅に寓居をつゝ実父母養育せ及
雛衣を墳墓の苔を拂ひ香華を向て念誦する時の程を見て左右なる程を秋山
なる故却雛衣の三回忌を辟て返る新道場に僧を聚へ経を讀しめて返はせ地を別
なる赤山石犬村なる所親氷六介に憂食賑の儲あり又現八を親族介夫婦養育家兵衛
夫妻の子大なる時時来る新祭ゝ犬村大飼両施主なり准備手厚なりけれ里人懇ゝ
感歎ゝ招ざれども結縁の道俗幾百名を独及ひけり絆果ゝ大角は又現八と商議を
氏名なしと知る犬塚大山犬田も東国の人なれが京師より西のゝ九州四国に枝を駐めゝ
光閃と遂べうもあるべ今宋国も又上野より武蔵下総を徧歴せん欲和殿のゝ所いかゞと向
へば現八頭ゝ某もの念慮あり下総の行徳は大田が故郷なるより暫く那里に赴ゝ

小文吾は故郷に還ゝ曳ゝ単節の往方を知るゝ絶ゝなりしかども既ゝ光閃を歴
て那文五兵衛尉羽は世を去りゝ家ゝ迹なるゝ
ゝと遠度は且行徳を心当に音連せん今ゝ猶豫ゝ
以来一大士あゝ沿遇それが舊里へ立ゝれど本意まゝ一日も先へ急べと心ゝて
赤岩犬村なる親氷六介に遂ゝ別を告て旦現八と共に這地を立ゝ時
文明十四年小文五十共が三月初の歌居
暑ゝ雨の驟雨のゝ色ゝ現八も大角も旅宿に驟ゝ
宇津宮に五七日杖を駐ゝ彼此とゝ遊歴ゝ是ゝ江戸へ赴ゝ行徳に到ゝ
と共伴ゝ一千日ゝ三日と末牌の比に武蔵州足立郡千住の郷
ゝ奥徳北の暖路を過る折驟雨猛可に降ゝ笠宿ゝ家も見れば現八の大角も
官を傾ゝ直奔ゝ路の小石に足を躓ゝ雷時夜に痛に勝

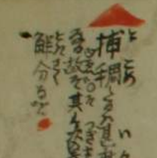
ぬりこん
現八

大角
ぬりこん

其外是男大角十二町許後方に知らぬ一人大角の者に走る程に背に駄ある行
裏の結理解け〳〵拵方る地上へ礫と落ると知らぬや考勢ひに七八間あと過ぐ
歩を止め〳〵其方を急まえの孔ハ跡より来る一個の男子がえや行裏を掻攫ひ〳〵逃んとす
大角の倘児等すと喚けり〳〵。捍合ふんとする程に賊ハ菅来りて大地路を横
切りて河原を抜て逃走ると大角ハ不脱ぎとく莫馬地あぞ捍ふうける者官をづくべ。
當時の住河ハ河の瀬分と同じ好く是這河ハ是墨田河の枝川なれ小流まあ千住ハ河の東まあり昔ハ
鎌倉より陸奥へ通ふ道に到る田畑在り。
また須田村に到る柳嶋に到れり。長原の江戸地図ハ阿佐谷千住に到り石濱に到り又石濱より墨田河を渡
錦金吾海道なるよりある後に長原の江戸図ハ千住街道ハ倘ハ西の本街道あぞ此下の村名を知ぬ今と
〳〵古の地理を論ぜハ解ま製〳〵剣を求る知らるべ。間訴休題余程に倘児ハ賊の連
逃走り〳〵河原に到ると元支度黒るべ一個の人辮者目取又元多る衣相を御〳〵捉ま

鵠立より省下件の倘児ハ那辮者を逐ふ〳〵一哥々拯へと喚けり〳〵捉に走る程に大
角ハ些も擬議せず。喧倘児奴が其首より前に脱て路ハ命惜くハ裏を返せと罵
つる足を信〳〵透さず〳〵趕近着くと両個の賊ハ立ぢと〳〵前に左右より栄螺
の如く巻を固め〳〵打んと競ふを大角ハ右を左に左を右に捱て烈く営る彼ハ煙の裏法ハ恐れを懲まれ
左より組む一個の賊の項を抱〳〵操返せハ右より撫る己前の倘児利もと合ると振拂ふ卯合ふ
井と大村の襦袢の袖を乾ぶる程ありそぞ大角ハ左右一度に投伏せ〳〵刀の柄を捉ハ裁ハ吐嗟
と怕る両個の倘児立ち足ハ〳〵堤より河へ水と跳入て泳ぎ〳〵潜り〳〵共に泳ぎ〳〵草
頭蛇の水を渉るに異なるに瞬間に前面の山岸なる千本の薄茅原に上げ〳〵往方も
知らざるかけ浩然に現ハを稍大村の跡を莫〳〵後走に来る程に驟雨ハえや
歇ちぬ。登時大角ハ現ハに〳〵那倘児の支の麻筒様〳〵と知〳〵
件の両個の乃人ハ世に尽ぬ喚倘る小賊でありけんか。此後共に投伏せ〳〵

斫て棄んと刀の柄に手をかけて挫し勢ひに怕れて河に跳入て泅ぎて俱に逃去る
余るに某の行裏に祝捶攫ひて走り来る倫偷児奴が這処へと来るけると思ひよ方魂
素なるあるとあり徳に二賊と挑う折に蹴落して水に流る欲きて那偷
児が辺て水中に今時に又捶攫ひて中に這推量に違ぬ輙ひて空に起ぬ
とふ世の鄙語に似たりける尼寂の折に霜倫に賢しれる通廉に熟れと早何見
おこのえんちつ
只這損失のこと於くべしと雖彩の尼袖を曳断離れて行くなりうるれも亦離れる
物風に吹れて水中へ自然と落て流れし欲油に惜むに足るものるに似て行裏に赤金も
あるりと那偷児きへ俺東西さへ今も留めぬ喪ひ嘻俺ぶら遅鈍り紀跡に遠ぶ這東西
のき這に依箱の火家の賊の先ぶらに這里まり時に傷に赤ありに是も赤何処より霜鶴取り
駝ひまに要時御して憩ひるん現得失に皆時に前面に露見れ這提に那偷児と趙
稠に甲斐に東西を喪ひて主に沿和に衣箱とやるに舎に留ぬ蓋に沿見と嘆くせ



現八然てと慰めに某に先の程雨に追れて走るに我中に路の小石に足に躓か
けて倒に獲れり倫初に力に勢に件の二賊に捕提るに行裏に衣に喪ぶ
物に及ぶに切に這衣箱の主に委に住と熟和に偽徳の一端に見るに
とふに角に沿に霜の説寔に主に沿に這里に毒に中に那偷児何が来
再駝に主に今唱に東西に喪ひ人の東西に喪ひ情詐に異に某に近
村に家毎に知に知に来に和殿に足に疼に有んに趙ひて且く
笑に相譚果て遂に限て作んとせ折に趙蒐に地方に在に各に隊
約十名に棲に扶に勢に猛く吼と嘻に既に近て銀頭に大角と現八に五在
なると在に沿に競に訛声に向く役に是に賊に那首に沿に追る辺に至と罵りて前後に事
血気に壮役走に鄭に三十に中に沿と合に巻け畢竟件に衆人に大角と現八に聽かし

里見八犬傳第八輯 巻之八四 下大長 終

○著作堂手集八犬傳第八輯上帙五弓画者筆工刷人目次

出像畫工　柳川重信□

總卷淨書　谷金川

第一卷　浅倉伊八

第二卷　横田守

第三卷　櫻木藤吉

第四卷上　原喜知

第四卷下　横田守

剞劂

八犬傳第八輯下帙五弓　巻の五より巻の八の下まで引ゞ近日賣出し

第一輯より第七輯迄再刷仕候求覧下され

閑巻驚奇俠客傳第二集　右第一輯五巻の仮名者より賣出し彼

第二輯五巻癸巳の春正月迄出板

近世說美少年録第四輯　第一輯より第三輯まで十五巻迄皆出板

第四輯五巻癸巳の春正月より賣出し

松浦佐用媛石魂録全書　前篇三巻出板後ノ分中巻迄所後篇十巻近来出板

前後二篇十巻全壁仕候求御覧可被下候

南總里見八犬傳第九輯　近刻

由良公記顛末記八犬誌二書ハ和漢今昔たゞひ稀なる奇作なるを以ゆゑに巻数多き大部なれど毎輯續刻の書肆は故あるにたゆく遅滯を及ひ公期候の君子のいとをうなるべきを知るべしかるに又公刊みなして第八輯上下二帙十冊に刊行せり第九輯のあつが記文を如何と遠ふべきを元の図数百四十五枚に一百八回を過と結ぶべきよりいはゆる全部もべて美くし四方の看官まうあの記と認て懷るく求めて見給へか　書林文淵堂報謹

○家傳神女湯　婦人ちのみち　一包代百銅

○精製芎藭丸　大包代金三分　小包代五匁　中包代壱匁五匁

○熊胆黒丸子　一包代五匁

○婦人名香の香素　一包六十四銅　半包三十二銅

○古今女教化部仙女香　一作に黒あぶら美玄香　一包代百文　江戸京橋南二丁目角　坂本氏

天保三年歳次壬辰□□月吉日發行

京橋水谷町　美濃屋甚三郎

本所松坂町二町目　平林庄五郎

小傳馬町三町目　丁子屋平兵衛

江戸書行

天保三壬辰年
春二月八日書了

著作堂多集

年

福硯壽

大吉利市